会　議　録

件　名：第2回「大隅地域おける県立垂水高等学校の在り方に関する地区検討会」
　　（略称：垂水地区検討会）
日　時：平成23年８月17日（水）午後９時30分～11時30分
場　所：垂水市民館　第１研修室（市民館２階）
出席者：尾脇委員長・肥後副委員長・堀之内委員・宮迫委員・北方委員・中川原委員・寺地委員
　　有馬（勝）委員・今井委員・坂元委員・池田委員・山田委員・有馬（修）委員・田ノ上委員
　　伊集院委員・橋口委員・八木委員・川井田委員・池之上委員・川畑委員
　　（オブザーバー）濱田垂水高校校長
　　鹿児島県教育庁高校教育課　３名・大隅教育事務所　２名
　　（事務局・その他出席者）企画課長・課長補佐兼計画調整係長・計画調整係主査　２名
　　企画課事務補助職員・教育総務課主幹兼庶務係長
　　（傍聴等）垂水市教育委員　野村委員

■開会：企画課長
開会に先立ち事務局から連絡事項の伝達。
県教育庁高校教育課３名、大隅教育事務所２名お越しいただいていること。

■市長あいさつ：尾脇市長
（要旨）
　垂水地区検討会の役割は、大隅地域の公立高校の在り方検討委員会に提出をする「垂水高校の在り方（案）」を審議し、取りまとめを行って頂くこと。
　大隅地区検討委員会への提示の締め切りが８月24日までであり、９月５日には各地区検討会の取りまとめを大隅地区検討委員会の場で発表し説明すること。
　「垂水高校の在り方（案）」は、今後の垂水高校の方向性を指し示す大変重要なもの。また同時に、大隅地域全体の事を考え、大隅地域の各公立高校が共存協力しあいながら、お互いを深めていけるよう積極的にこの地から提言をしていく。
　垂水高校の存続、振興対策について私は以前より地域の活性化のために最優先に取り組む課題の一つであり、この４月から庁内で検討会議を設けスピード感のある対応を行ってきた。この動きは、たるみずフェスタでの取り組みをはじめ、市民の皆様や NPO の皆様にもご理解をいただき、さまざまな支援の輪が広がり始めているところである。
　先日テレビで東北大震災の被害に逢われた方々が復興への道筋を歩み始めている中で地元の方が「復興とは感謝の気持ちを忘れない事」、そして何よりも「大人が頑張る姿を子供に見せること」という話があった。今こそ垂水市が心を一つにして挑戦をしていく時期である。

■議事
※企画課長：議事の進行は、本会設置要綱の規定により、尾脇委員長が行う。

〇議長（尾脇市長）：はじめに本日の会の概要について事務局の説明をお願いする。

●事務局：
・資料の確認。
・今日の会議の内容の流れ、ポイントを説明。

〇議長：議題１、垂水高校存続対策事業の第１回垂水地区検討会以降の取り組み経過について事務局の説明をお願いする。

●事務局：
・協議題１の①について説明。
・協議題１の②パブリックコメントの実施等について説明（資料１）
・協議題１の③各地区検討会の報告。
・協議題１の④最近の垂水高校の支援の動き。ビデオ上映。
・協議題１の⑤、参考資料１・参考資料２の説明。

〇議長：ご質問、ご意見等がないか。

〇　委員：今、ビデオにあったが商工会のご理解により、フェスタの最後のプログラムに「まちづくり」たるみずが行っている活動をいれてもらった。映像では少し自信のなさそうな踊りをしていたが、本当に自信がなく踊った後も反省していた。
参加した生徒は、全員１年生で自主的に集まったが練習期間は１週間であった。
最後の練習の時、「練習が終わったあと、勉強を教えてほしい」と言われ驚いた。踊りをすることでやる気を出してもらうことが目的だったのでうれしかった。
魅力ある垂高づくりの課題に「学力」の問題がある。これまで、先生方も頑張っているが、教育長時代にはすべて学校任せであったことを反省している。今は民間に何ができるか、どう支えていくかという考えでNPOが主体となって取り組んでおり、今回の企画が生まれた。先ほどの「勉強を教えてほしい」という気持ちが出てくると学力もついてくるので、早速英語と数学の基礎から教えることになった。

〇議長：他に何かございませんか。

〇　委員：参考資料２の６ページ、テーマ３の「垂水市の生徒は私立の高校へ進学する生徒が多いのか？」というところの４行目「県全体を見ないで垂水高校の定員数だけを見るのは論外である。」文章があるが、ちょっと理解が出来ない。どういう意味なのか。

●事務局：言葉の表現が悪かったが、前回の会議等で垂水の生徒は私立に進学している割合が多いという話があったが、実際には県の平均と変わらないことを表現したかった。

〇議長：次に、議題２、９月５日に開催される第２回大隅地域の公立高校の在り方検討委員会に提出する「垂水高校の在り方（案）」の承認について事務局より説明をお願いする。

●事務局：
・資料２、資料３の説明

〇議長：皆様にご検討いただくのがこの中身についてであり、いろんな背景がある中この案を提案をさせていただいている。今ありました議題２、大隅地域の公立高校の在り方検討委員会に提出する「垂水高校の在り方（案）」の承認についてご質問はないか。

－委員－：(特になし)

〇議長：それでは議題２、大隅地域の公立高校の在り方検討委員会に提出する「垂水高校の在り方(案)」については事務局案のとおり承認してよいか。

－委員－：(異議なし)

〇議長：それでは事務局案のとおり承認する。
次に議題３、垂水地区検討会の今後の取り組み内容について事務局より説明をお願いする。

●事務局：
・資料４の説明。

〇議長：事務局より説明があったが、より詳しい内容は後日事務局へお尋ねいただきたい。
次に議題４その他であるが、何かお話をされたい方、全体を通してご質問、ご意見等があれば承りたい。

〇　委員：これだけの資料を短期間に揃えられたご尽力はすごいと思う。大変な努力が言葉の端々にも表れており、資料２大隅地域の委員会に提出される文章は煮詰められた文章という気がするが、この資料を全部読み込んでいかないとこの１枚を読み解くのは難しい。
これは委員会に出される文章ですからこれでいいと思うが、広くみんなに分からせる文章としては非常に難解ではないか。もう少し工夫し一目瞭然でわかる様な資料をつくられて広く配布していくことが、これから市民運動として盛り上げていくためには必要と思う。

〇議長：３月議会で垂水高校の問題について質問があり、市長はどのように考えるかという話の中で、まず係を決め、次に政策を立て、政策に対して予算をつけるという流れを示した。２人の担当がゴールデンウィークを返上して自分たちの足で高校と連携して、課題が何でどう対処をしていくのか真剣に考えて資料が出てきた。ただし、これを一般の方に理解していただくという段階になると分かりにくい部分もあるので、広報の仕方が今後の課題となる。

〇　委員：県教委の方に、垂水高校を残すため垂水高校を魅力ある高校にして定員を満たせるようういい学校にしていけるよう一生懸命頑張ってみますので、しばらく猶予をくださいというスタンスでいいか。

〇議長：なかなか一言で言いにくい部分もあると思うが、従来の定数とか数の理論ではなかなか計れない部分があり、視点を変えて地域にとってどうやったら魅力ある高校になるかという視点で今回は議論を重ねてきた。今回は５つの柱を立てて、具体的にどうやったら魅力あるものになっていくのかという点において、具体的な振興支援策を 40 程度提案したところである。この考え方でやりたいということを市の立場で提案をさせていただいたが、実際には垂水高校自体、学んでいる生徒、先生、PTA のみなさんを含めた協議をしながら魅力ある高校をつくっていきたいと考えている。結果的に目的に沿っていけば魅力ある学校として垂水の中に存在し続ける。県教委にこれでやります、お願いしますということでなく、この考え方で垂水高校と話をしながら地域にとって必要な学校づくりをスタートした状況である。学校づくりに２つのポイントがあり、１つは普通科の学力の向上、生活デザイン科は大隅あるいは県内でも特色のある取り組みを実現させていけるよう頑張っていかないといけない。

○　　委員：長期的にはそういったことでいいが、南日本新聞の８月13日付で公立高校の進学希望状況が掲載された。ショックを受けたが、普通科の希望者が17名、生活デザイン科の希望者が13名という状況。もう期間がなく来年の３月には入試、４月には入学という状況なので、今私たちが話し合っていること、一生懸命頑張っていることを中学３年生の子供達やその保護者達にPRをして、垂水高校は今までよりも魅力あるものになっていくということを心に留めさせ、数が増える様にそれぞれの立場で頑張っていかなければいけないのではないかと思う。

○議長：私も新聞で数字も見たが、確かに現状の数字というのは厳しい。ただ私は正直なところその事にあまり気にしていない。本来ならばもっと早い段階でこの問題に取り組んでいけばまた違う状況もあったと思うが、４月に決めてこの短期間で考えた中で一つの光明が見えてきたと思う。県教委の考え方の中で、魅力あるものをつくることが大事であり、単年度でどうこう言うものではないと教育長とも話をさせていただいている。数年の動向を見ながら結果を出していくというのが大事ではないかと考えている。

○　委員：資料に関しては素晴らしい資料がまとまっているが、実践しないと意味がないので誰がリーダーとなってどうマネジメントして実践していくかが今後の課題だと思う。
私は現場を知るというのが一番好きな言葉で、実際この会議が役立つのかということが心配な所である。現状を言うと７月22日に垂水高校の体験入学があったが、その話がここに一切出てこないのがおかしいと思う。20人くらい垂水中央中から参加があったと聞いているが、私の娘は申し込みを忘れており締切が過ぎているので断られた。本人は行く気はあるのか垂水高校に希望しているのでその辺が残念だった。実際、体験入学で20名の中で参加した子たちの感想を聞きたかったが、あるところから聞いたら、行くのはやめたという子が２，３人いたらしい。だからもっと今の垂水高校の現状を話し合うべきではないか。自分の事ですが、中学の時に野球部に入っており、本当は鹿児島商業に行きたかったが、監督が「お前たちは垂高に行って甲子園を目指さんか」という話で８人くらい垂高に行って、野球部に行って今ではよかったと思っている。ということは学校の先生の影響力はかなりあって、ぜひ中学校も一生懸命になってもらって垂水高校でも立派にやっていけることを取り組んでもらいたい。いくらここで議論しても現場が動いてなければ問題は解決しないので、もう少し現状にいかしてもらいたい。

○議長：今、話にありましたがまさしく現場のいろんな課題が私の耳にも届いているので、そういったものを改善しながらやっていかなければいけないと思う。

○　委員：商工会代表として参加をしていますので、その立場で意見を言わせていただく。今回のフェスタにNPOの提案でよさこいの踊りがあったが、商工会青年部も色々と企画をしたようで、花火前に弓道部の生徒に赤々と燃える松明をひかせる企画、それとステージに垂水高校を残そうという看板を掲示する企画をしたようである。それと10月に中央商店街、など３通り会で３年目になるがエコキャンドルを行う予定である。その中で垂水高校生たちに商売を体験してもらおうということで、垂水高校デパートをつくる新たな企画を進めている。それともう一つ、垂水高校存続の活動をするときの資金確保策のため、３年前に千人千円委員会を理事会で提案をした。商工業ですので活動するときの資金はどうするんだというのがまず頭に浮かぶが垂水の予算を考えると年間予算91億、鹿屋が430億でこの財政力の差というのも自分たちの町として考えなければいけないと思う。それで毎月千円ずつ垂水高校存続のために提供をしたいという人を千人集めたら月100万、年間1,200万になる。千人集めるのは大変であるが理想としての数値として千人千円委員会をつくり垂水高校存続のための資金にしてはどうかを提案したい。川井田先生も言われたが、学力向上が非常に大きなテーマで高校生を持つ親の一番の関心でもある。そ

ういう資金を活用して進学を希望する生徒へ塾の提供、校外で勉強をする場、スポーツをすることに対する支援とかいろんなことに対応をしていければ。長い期間することは難しくても、時限的にそういう仕掛けをするということも実現の可能性があるならば検討して頂ければ。

〇議長：委員の方から具体的なご意見をいただいた。事務局の方で検討をして対処させていただきたい。

〇　委員：県教委の方にお聞きしたい。進学希望調査の結果、普通科に限ってですが鹿児島市は相当な倍率で、その他各地域の中心校、鹿屋、加治木、出水は定員オーバーになっているんですが、その他の高校周辺の普通校はほとんど50％ぐらいである。この結果をご覧になって今後どのような指導をしていかれるのか。それとも、全く指導はしないで各学校に任せるのか、そういうところを具体的に聞かせていただきたい。

●県教委：昨年も出水高校は募集減、志布志高校は英語科をなくすなど昔からの進学校も生徒数の減に伴って募集定員を減らしている。募集定員の基本は、生徒の進路希望調査、学校、地域の状況である。あとは校長先生方が生徒募集に頑張っていただくしかない。

〇　委員：具体的に県教委の方からは何も指示はないわけですね。

●県教委：県教委としても当然学校の方には生徒は減っていくので、これまで以上に中学生にPRするよう指導はしている。色々な面でPRしているが、生徒減少が激しいので進路希望調査で定員割れが続いているのが現状。全く手をこまねいて何もしていないわけではない。

●県教委：先月、ある地区の検討会で生徒を通じて学校がPRの資料を配ったが親まで届いてないという実態もあった。親御さん方が学校の実態を知らないこともあるので生徒に配った資料が親まで届けばもっと効果がでると思う。

〇議長：時間も迫ってきましたので最後の質問とさせていただく。

〇　委員：垂水の理念が決まり、今後フィードバックされるとのことだが、このことは評価される価値はあるのか、どこら辺まで評価されるのか。ただやりました、そういう会では困る。

●県教委：第１回の地区検討会で今後の進め方の話があったが、地区検討会は県教委が口を出す会にはしていない。第２回の大隅地域の公立高校の在り方検討委員会でご審議いただくので、私たちがどうこう言う立場にない状態である。

〇　委員：大隅の委員会で決まって県教委にいくが、その場合どうされるか。

●県教委：来年３月に大隅地域の公立高校の在り方検討委員会で取りまとめをしていただきますが、それをふまえて県教委では魅力ある高校づくりに努めていきたいと考えている。

〇議長：以上で本日の会を終了させていただく。

■閉会あいさつ：肥後副委員長（教育長）

今回の主な審議の中は９月５日に行われる検討委員会に提出する資料２の審議であった。八木委員からも出たがこれは理念が掲げてある。この理念は非常に立派でこれをどうするかというのがこれからの我々の仕事である。具体的な事は先ほど皆さんに追加資料として個表が出されているがこ

こに中心となる活動主体が書かれている。垂水市、市教委、あるいは関係団体とか垂水高校と書いてあり、関係団体は今日ここにお集まりのみなさんである。今後垂水高校振興対策協議会で審議していく。また、短期的にやらなければならない事、中期的にやる事、長期的にやる事、峻別をしていかなければならない。

いずれにしても、垂水高校をどう振興していくかということは、垂水高校自体の行動力にもかかっている。垂水高校の考え方と、われわれの考え方にかい離があるとうまくいかないので密接な連携をとりながらやっていきたい。

それから7月 10 日付の進路希望調査では、われわれも一生懸命努力をしているが、普通科が 17 名、生活デザイン科が13名であった。これをどんなふうにしていくのかというのも重要な事である。進路指導は「みんな垂水高校に行け」という指導はできないわけで、それぞれ子どもたちには夢があり、その夢を実現させるためにやるのが進路指導だと思っている。ただ、迷っている子供達もたくさんいるので、そういう子どもたちに、垂水高校も今一生懸命頑張っている、これから先もこういう高校になっていくんだからどうかという指導も必要だと思う。これからみんなで知恵を出し合って魅力ある垂水高校にするために、頑張っていきたい。

■閉会：企画課長

以上で第2回大隅地域における県立垂水高校の在り方に関する地区検討会を閉会する。